支店長の わがまち紹介 第61回

常総きぬ川花火大会

常総市

筑波銀行は地域金融機関として、地域の皆さまとの密接な繋がりを持たせていただいております。「支店長のわがまち紹介」は、筑波銀行の支店長が所在エリアの市町村をご紹介させていただくコーナーです。今回は茨城県常総市です。水海道支店長が常総市長 神達岳志氏にお話を伺いました。

常総市は「筑波経済月報」第13号（2014年8月）第13回本コーナーにて紹介させていただきました。改めまして、本市の魅力や特徴についてお聞かせください。

■市民力の強いまち

市長に就任してまず感じたことは、「常総市の市民力の強さは、どこにも負けない」ということです。

本市は平成27年9月に発生した関東・東北豪雨により鬼怒川の堤防が約200ｍにわたって決壊し、死者2名、負傷者40名以上、全半壊家屋5,000棟以上という甚大な被害を受けました。

しかし、この時、市民同士の「助け合い」がいかに大切かを改めて気付かされ、その後は地域のイベントや市の事業に参加する人数が回を重ねる毎に過去最高を記録し続けています。

また、水害時の炊き出しで知り合った市民同士が「今度のイベントは一緒にやりましょう」と一致団結する姿も見受けられます。そのため、地域の

常総市長
神達 岳志氏

水海道支店長
内村 尚史

イベントでは、市民の有志団体、女性団体、学生達が中心となりまちを盛り上げています。最近では市街地中心部にある「市民の広場」についても、活用促進に向けた協議会を結成し、市民の力で運営しようという機運が高まっています。

「市民の広場」でのイベント

■郷土愛の醸成へ向けた取り組み

本市の先人たちは、鬼怒川の恵みに育まれる一方で、幾多の水害を受け、知恵や努力、助け合いで乗り越えるという歴史を繰り返してきました。今回の水害は昭和13年以来ですが、その事実を知らない世代も先人たちと同じように助け合いました。その様子を見て市民のDNAには、鬼怒川と小貝川に挟まれた土地で集落を作り、お互い助け合いながらまちを守っていくという意識が根づいているのだと感じました。

私はこの時を境に、定住人口の増加や移住促進以上に、本市の子どもたちが将来この土地を離れたとしても、「常総市のために何かしたい。生まれ故郷に戻りたい」と思ってもらえるようにするため、郷土教育を通して、市民みんなで地元の子どもたちを育てていくことが大切なのではないかと考えるようになりました。

そこで、本年4月に地域交流センターである豊田城をリニューアルし、子どもが楽しめるような絵本や漫画による郷土資料を充実させました。また、デジタル展示室では、長塚節（ながつかたかし）が残した短歌の世界観を現代に甦らせる工夫を凝らした展示内容にしています。子どもたちが本市の郷土を知り、さらに本市を好きになってほしいと願っています。

地域交流センター　別称「豊田城」

■防災先進都市を目指して

本市は関東・東北豪雨の経験から、災害に対する備え、防災対策が最も基本的な施策であると再認識しました。

そのため、本市では、本年4月から「常総市防災アプリ・防災ポータルサイト」の運用を開始しました。アプリをダウンロードすると、避難指示などの緊急放送のメッセージが通知され、市外にいても常総市が発表する緊急放送の内容を確認できます。

また、ポータルサイトにアクセスすると、過去の放送内容を聞くこともできます。これらは、英語、ポルトガル語、スペイン語にも対応しており、外国人居住者にも正確な情報を伝えることができます。

さらに、「障がい者の防災を考える連絡協議会」と本市が共同で作成した「わが家の防災ガイドブック」を全戸に配付しました。このガイドブックは、災害の想定から発生以降の対応手順をまとめた「マイ・タイムライン」を掲載するとともに、様々なチェック項目を設け、各家庭独自のガイドブックが作成できる作りとなっています。

このほか、自主防災組織の活性化を促すために、防災士の資格取得費用について本市が受講者に補助金を交付する制度を創設しました。

今後も、市民一人ひとりの防災意識を向上させるとともに、地域ぐるみで防災に取り組み、「自助」「共助」「公助」の高次元な連携による「防災先進都市」を目指してまいります。

■圏央道を活かしたまちづくり

本市は圏央道茨城県区間の全線開通に伴い設置された常総インターチェンジ（常総IC）を活かしたまちづくりを進めています。

常総IC周辺は、健康を食育や農業から見つめなおす拠点として、農業の6次産業化を進めます。また、東部地区の地域交流センターおよび中心市街地の「市民の広場」を地域交流の拠点、工業団地を財政・雇用を支える拠点、その両側に位置するきぬ総合公園と石下総合運動公園をスポーツの拠点として融合的に活用することで、交流人口を増加させたいと考えています。

その1つとして、2020年に鬼怒川緊急プロジェクトによる堤防整備が完了した後、下妻市と共同で鬼怒川の川岸にサイクリングロードを整備する予定です。東京から50ｋｍ圏内という近さで、壮大な関東平野を背景に美しい夕日が眺められる、川岸の44ｋｍものサイクリングロードは、他にはありません。また、1日に100ｋｍを走るサイクリストも決して少なくなく、埼玉県や千葉県の方が本市を訪れることも多いようです。関東鉄道常総線には自転車を乗せることができるため、サイクリングロードが整備されれば、交流人

口の増加に期待が持てます。

さらに、市内各所にレンタサイクルを設置することで、市内の観光スポットを自転車で周遊することも可能になります。「あすなろの里」に宿泊する流れができれば、日帰りコース、1泊コースなど、観光の仕方も広がります。

常総インターチェンジ

■今あるものを活かしたまちづくり

市民の心の中には、都心やTX沿線と同じようなまちになることを望んでいる方もいます。しかし、公約にも掲げましたが、ないものを望むより、あるものを活かす方が、よりよいまちをつくる近道になります。

幸いにも、本市には美しい自然や歴史的価値の高いものが数多くあります。また、都会では味わえない体験ができ、美味しい食べ物もたくさんあります。

「みんなでつくる　しあわせのまち　じょうそう～あの人がいるから　このまちがすき～」を基本理念に、今あるものを活かし、本市だけでなく、茨城県全体のためになるまちづくりをしたいと考えています。

■常総ふるさと市民登録で第二の故郷へ

本市では現在、「常総ふるさと市民登録制度」を整備し、準市民登録を進めています。この制度には、2つの大きな目的があります。

1つは、もとは本市民で仕事や結婚、学業などの理由から本市を離れた方に、本市をふるさととして愛着をもってもらい、帰ってきてもらいたいということです。この登録を行うことで、本市から定期的に季節のイベントなどの情報を受け取ることができます。常に本市と繋がっていると感じてもらえれば、「帰ろう」という気持ちにつながるのではないかと思っています。また、登録をすることで、指定された観光施設でのプレゼントやおもてなし協賛店でのご優待など、充実した特典を受けることができます。

もう1つは、普段からこのような形でつながっていれば、緊急時に助け合えるのではないかと考えたためです。水害時は全国から38,000人もの方々が本市へボランティアに来てくれました。その中には1ヵ月間も滞在してボランティアを続けてくれた方もいます。

既に2年半の時が流れましたが、その方々は毎年のように本市を思い出し訪れてくれます。そのような方々にふるさと市民登録をしてもらえれば、本市の情報を定期的に提供して安心していただくとともに、何かあった時には、またつながることもできます。そして、その輪はさらなる交流人口の増加にも大きくつながっていくと考えています。

現在、目黒区民や都議会議員の方々なども登録をしてくれています。これは首都直下型地震などへの対応、そして東京にはないものが常総にはあると分かってくれているためです。

今後、さらに登録者数を増やし、第2のふるさととして交流を続け、田舎に来たいと感じた時には、本市を訪れてもらえればと考えています。

■筑波銀行に期待すること

これまでも、「市民の広場」の毎朝の掃除、市民とのふれあい、イベントの手伝いなど、様々な側面で支店の方々に取り組んでいただき、大変感謝しています。また、分かりやすい地域分析や情報提供は非常に助かっています。

「いきいきスマイル」の定住促進策においては、金利面で協力していただき、市民も感謝していると思います。実際、「つくば市やつくばみらい市に家を建てようと考えていたが、この施策を知り、地元を選んだ」という方々がたくさんいます。問い合わせも既に200件近くもあり、嬉しい限りです。

「常総ふるさと市民登録制度」を含め、今後ともご協力をお願いいたします。

取材日：平成30年5月29日
写真提供：常総市